

青空の絵画

迎賓館赤坂離宮「羽衣の間」の天井画を中心に

東京藝術大学教授 佐藤直樹

迎賓館の装飾計画について

1909年（明治42年）に完成した赤坂離宮の建設の指揮をとったのは片山東熊（1854-1917）であった。しかし、室内装飾について片山は多くを語っていないが、東宮御所の装飾設計についての基本方針を知る上での重要な発言が1899年（明治32年）10月24日付のニューヨークの日刊紙『バッファロー・クーリエ』（Buffalo Courier, N.Y.）紙でなされている¹。片山は新宮殿が「最高級」（finest）なもので「装飾には日本美術とヨーロッパ美術とアメリカ美術の最高のものを組み合わせなければならない」と述べた²。室内装飾に関する工事が、1906年（明治39年）に本格的に始まると、多くの家具調度品がフランスを中心とする欧州から購入された。

こうした片山の意向によって、欧米の美術様式に日本の様式を組み合わせる試みが実行された。その最たるものは「花鳥の間」の装飾であろう。渡辺省亭（1852-1918）の原画が1906年に採用決定され³、濤川惣助（1847-1910）による七宝焼の額画が30面完成する。ここで採用された日本人美術家はいずれも当時の日本

を代表する美術家であり万博などで国際的に高い評価を得ていた。絵画ではなく、七宝焼、タピスリー、刺繍といった西欧で高く評価されていた美術工芸作品で飾ったのは、片山が外国からの賓客の視点を意識してのことだった。フランス風の宮殿装飾に、万博などで評価を得た日本の美術工芸品を組み合わせる手法によって、外国人にわかりやすいことを目指したのだろう⁴。

「朝日の間」と「羽衣の間」の天井画については、その画題が部屋の名前になっている。『御造営誌』には、羽衣の間の画題が謡曲の「羽衣」であり、「『虚空に花降り音楽聞こえ霊香四方に薫ず』とある美妙の景趣を採り画題となせる」と記されていること、当時の新聞で朝日の間について「日本六龍に賀すとの画題にして日本帝国を意味し旭を迎えて山桜をあしらへ居る像」⁵と記されていることから、この両間に関しては日本側から画題の提案があったことは間違いない⁶。

これら 2 階の天井画に関しては、会計書類を見る限り全てがフランスで制作され購入したものであることが明らかになっている⁷。『御造営誌』には各部屋の室内装飾に関する記述があり、天井画については 22 室、そのうち朝日の間と羽衣の間をはじめとする天井画については「仏国名手の油絵を貼れり」など、フランス人画家の関与が記され、購入年月日、購入先、金額も記されている⁸。朝日の間については、作者の名前が記されている。

「朝日の間は・・・【中略】・・・仏国名画師「ペルツ」の監督の下に諸名流か丹

精を抽て画ける所なのものなり」⁹

しかし、これ以上の具体的な記録は残っていない。この画家の特定に関して、平賀あまな・野口沢子の2人は、天井画が制作された年を中心に1900-1907年と幅を持たせた文献調査を行なっている¹⁰。その結果、アレクサンドル・カヴァネルの弟子で歴史画やジュール・バステイアン・ルパーージュに影響を受けた自然主義の風俗画を得意としたスペイン系のフェルナン・ペレス(Fernand Pelez, 1843-1913)が第一候補に挙げられた。しかし、ペレスを専門とするフランスの学芸員に聞き取り調査したところ、作風および活動内容から迎賓館の天井画を描いた可能性が否定されたという¹¹。確かに、ペレスの他の作品を見てみると、この天井画との関係は直接に見いだせないのではあるが、「空を描く」という日本からの発注に従ったという可能もあり、候補者から除外することはないように思われるが、今後の調査によって画家の素性が明らかになることを待つしかない。

朝日の間の主題について

「朝日の間」では4頭立ての馬車(香車)を操ることから、ローマ神話の太陽神アポロや曙の女神アウロラに重ねられており、この女神が天井画の主題となっている系譜をイタリア・バロック期の天井画に求めることができるだろう。ただし、その手本が何かという問題よりも、なぜ女神が迎賓館で主要な謁見の間であ

る「朝日の間」に選ばれたのかということに注目すべきだろう。『御造営誌』には「神女か玉馬に鞭ち香車を駆るの図にして国運隆昌の意を表彰し」としか記されておらず、それが「アウロラ=曙」の擬人像として描くようにという指示、あるいは了解はなされていなかった。事実、この「神女」の表象には古代の女神が選ばれて「国家隆昌」のイメージが重ねられていることが重要だろう。当時の国際的な国家イメージ戦略が見えてくる。若桑みどりが指摘したように、国家を表す像として明治政府が用いたのは神功皇后（じんぐうこうごう）と天照大御神であった¹²。つまりこの女性像は、朝日を連れてくる女神であり、日本神話の天照大御神がギリシャ・ローマ神話のアウロラに重ねられているのである。

羽衣の間の主題について

羽衣の間の天井画の主題は、『御造営誌』にあるとおり「図様は謡曲羽衣の文中に『虚空に花降り音楽聞こえ霊香四方に薫ず』とある美妙の景趣を採り画題となせる」¹³ことが、この部屋の名称の由来となっている。ここで「美妙の景趣」明示されているように、非常に美しい景色とその趣きが無人の空の表現で表されている。そして謡曲「羽衣」が主題とされていることも示されている。

日本の羽衣伝説は、天人の羽衣を見つけた漁夫と羽衣を返してほしい天人の掛け合いであり、羽衣を返してほしい天人が舞を披露するものだ。正直者の白龍

(はくりょう) が天女の言葉に感動し、衣を返す物語となっている。迎賓館の天井画では、空から花が降り、音楽が聞こえ、良い匂いが立ち込めていく様子での場面を表している¹⁴。この美しい景色はこれから天女が登場する場面であり、天女は天に上るための羽衣を落としているので上空にその姿を見ることはできない¹⁵。舞踏会のためのこの部屋にはオーケストラピットがある（実際に使用されたことはない）。舞踏会に招かれた紳士たちは漁夫の白龍となり、淑女たちは舞を舞う天女ということになるという仕組みなのだろう。朝日の間には国家の象徴としての「女神」が描かれていが、羽衣の間では日本という国家が天上界と通じる特権的な地域であることを示しているのである。

おわりに－日本美術の系譜を引き継いだ天井画の完成

西洋美術の特色としては空間を人間像で埋め尽くすという傾向がある。ルネサンスの巨匠ミケランジェロによる《システィーナ礼拝堂》が代表例だろう。ギリシャ時代より西洋美術は人間像の表現が中心主題であった。それに比べて日本の障壁画は、基本的に風景描写である。人間像が風景に立つ場面もあるが、それでも西洋のような人間像にとり囲まれる空間が作り出されるようなことはない。室町時代の將軍邸の会所が漢画様式の襖絵で飾られていたことは、現物が残されていないものの、多くの古史料が伝えてくれる。例えば、足利義教の室町殿や

新造会所の十二間の襖には周文が描いた《四季山水図》があった。中国式の水墨画による理想的な風景表現が日本の室内空間を飾ってきたことがわかる。続く桃山時代になると、襖絵は、水墨の松林のこともあれば智積院のように四季の樹木が豪奢に表されるようになるが、そこにも人間の姿はなく花鳥風月のみの世界が表現された。過去の日本絵画と比較することで、迎賓館の装飾の特徴が明らかになってくる。確かに、片山東熊は最初から、日本と西洋が融合した装飾を目指していたのだった。

なるほど、花鳥の間では、日本の花鳥画の伝統を七宝という工芸作品で見せることで日本の美術工芸の技術力の高さを示し、朝日の間では、日本の神話的世界を西洋風に描き、西洋の歴史画の系譜に沿うような西洋式の天井画を作り上げた。西洋の壁画の系譜にあるように、神の姿（=人間像）が登場するこの第一の客間は、西洋列強に並ぶために自国の文化力を西洋の様式で見せることで、公式な謁見の間にふさわしいものになっている。そして、羽衣の間は、舞踏会という交流のための空間ではあるものの、能の謡曲「羽衣」で語られた日本神話とのつながりが表現されていた。能舞台のように、装飾を極力排除したミニマルな装飾は、政治的色合いを視覚的には排除し、極力、装飾上は明白で単純な空間を作り出そうとしている。天女の姿は見えず、そこにあるのは空だけだ。事実、西洋の宮殿には空だけの天井画の例がほとんどないことを鑑みても、本作は全くの新しい

試みであり、かつ極めて日本的な特徴を持つ装飾壁面に違いない。西洋では、讃えるべき君主像を神格化した人間像が壁画の中心であった。しかし、「羽衣の間」では、日本の室内装飾の系譜に沿うように、人間像を排した空のみの天井画によって「日本式西洋画」の誕生を告げているのである。

¹ 平賀あまな「〈迎賓施設〉としての旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）とその装飾」『家具道具室内史』第11号、家具道具室内史学会、2019年、p. 62.

² 平賀、p. 62.

³ 『渡辺省亭－欧米を魅了した花鳥画－』東京藝術大学大学美術館、2021年、p. 76.

⁴ 平賀、p. 68.

⁵ 「新東宮御所拝観」『東京日日新聞』明治41年(1908年)2月8日、3面。

⁶ 平賀、p. 68.

⁷ 平賀あまな、野口沢子「旧東宮御所（迎賓館赤坂離宮）造営へのフランス人装飾家の関与」『日本建築学会大会学術講演集』2015年、p. 10.

⁸ 平賀、野口、pp. 6-8.

⁹ 平賀、野口、p. 7.

¹⁰ 平賀、野口、pp. 12-14.

¹¹ そのフランスの学芸員の名前は明かされていない。平賀、野口、p. 12.

¹² 若桑みどり『皇后の肖像 昭憲皇太后の表象と女性の国民化』筑摩書房、2001年。

¹³ 平賀、野口、p. 6, 表1.

¹⁴ 岩井智子『旧東宮御所（現迎賓館赤坂離宮）の室内装飾－美術家・主題の選択－』令和2年修士論文（未刊行）、図版編、東京藝術大学美術研究科日本・東洋美術史研究室、2020年、p. 63.

¹⁵ 岩井、p. 63.